

小結

以上の考察から、五行説を構成する「木・火・土・金・水」や諸事物への配当、そして相勝説といった事柄について、先秦期の状況をまとめると下の表ようになる。それぞれ部分的に共通点を有していることから、領域を超えた交渉が考えられる。

しかし、例えば時令は季節ごとの事柄を述べ、五徳終始は王朝交代を論じるといった具合に、それぞれが全く別の事柄について五行を用いているに過ぎず、それらを体系化して統一した五行説が唱えられた形跡は見られない。また、時令説同士でも、季節の扱い方や五音の配当に異同が見られ、統一されていない。同じく五行を用いているとはいえ、それぞれ別個の説として並存したのである。

つまり、他の分野の説を部分的に利用して自説を拡充することはあったものの、彼我の説を総合的に整合させようとする意識は見当たらない。

『呂氏春秋』十二紀	睡虎地『日書』	五徳終始説	『管子』五行	『管子』四時	『管子』幼官	『墨子』貴義	『墨子』經・經説	『春秋左氏伝』	『尚書』洪範	
○	○	○	○	○	×	×	△	○	○	五行の名
○	×	○	×	×	○	×	×	×	○	数
○	×	×	×	×	○	×	×	×	○	五味
○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	五色
②	×	×	×	×	①	×	×	×	×	五音
○	○	×	×	○	○	○	×	×	×	方位
①	×	×	②	①	①	×	×	×	×	季節
○	○	×	○	○	×	○	×	△	×	十干
×	○	○	×	×	×	×	△	△	×	相勝

「○」は有、「×」は無、「△」は部分的に見えることを示す。

「①」「②」は互いに異なる配当を有していることを示す。